



TITLE:

うつ病者の回復過程に関する心理臨床学的研究－集団芸術療法の視点から－(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

新居, みちる

CITATION:

新居, みちる. うつ病者の回復過程に関する心理臨床学的研究－集団芸術療法の視点から－. 京都大学, 2018, 博士(教育学)

ISSUE DATE:

2018-03-26

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20852>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（教育学）	氏名	松浦(新居) みちる
論文題目	うつ病者の回復過程に関する心理臨床学的研究 — 集団芸術療法の視点から —		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、医療機関において長年芸術療法を実践してきた著者による、主としてうつ病を抱える患者への心理支援を行った実績について、多角的にまとめ、その回復過程への寄与について検討した論文である。</p> <p>本研究着手の端緒を示す序章から始まる論考は、まず第1章において、「うつ病の概念と治療の歴史的概観」を行い、本邦のみならず世界的に長い歴史をもつ「うつ病」の理解について、心理療法という軸からまとめ上げる。そこで焦点づけられた集団精神療法を中心として、第2章では、「うつ病治療におけるリワークの課題と集団芸術療法」として、集団精神療法、芸術療法の二つのアプローチについて丁寧なサーベイがなされる。本論文で取り上げるリワークとは、精神疾患を原因として休職している労働者に対する職場復帰に向けた医療機関のリハビリテーションを指す。まず著者は、うつ病治療に寄与する心理療法の中でも集団芸術療法の治療的役割について、仮説として次のような視点の明示を行う。まず、うつ病休職者における心理療法の機能として、修正感情体験が生じ、内的外的現実がともに回復していくプロセスの寄与、次にうつ病休職者と双極性障害を抱える休職者では、表現性や回復過程に特徴的なものがみられるであろうことをあげている。そしてそのために集団芸術療法のセッションには、各段階に応じた素材の構成度や、素材の用い方、適用を考慮して実施すべきであり、それによって回復過程に影響を及ぼすであろうというものである。本論文が丁寧な心理療法プロセスを素材とした事例研究でありながらも、実証的な検討を進めようとする意義を示している。</p> <p>これらを前提として、第3章から第5章にかけて事例研究が進められる。うつ病像を呈する休職者の集団芸術療法を用いた2事例を元に検討を進め、本論文の主題である集団芸術療法の意義として「自己洞察」と「現実感覚の回復」、「気づきと受容の促進」に有効である点を主張する。次いで、更年期の問題を抱えるうつ病女性の事例を取り上げ、ライフサイクルの視点を盛り込んで回復過程の検討を行う。</p> <p>転じて第5章では、躁病像を伴う双極性障害の休職者に対する集団芸術療法の意義について事例研究を素材に考察する。ここでは、「からだ」にも注目した論考が進められ、休職期と回復期では、治療で扱う層の異なることも明示している。それぞれの事例研究において、この技法がすべてというある意味学術的な傲慢さは背景に置かれ、真摯な態度で、すべてにおける「限界」についても検討が加えられている。強い主張と共に多くの心理療法の可能性への尊厳も念頭に置いた議論である。これらの事例研究をまとめて、第6章と第7章において、総合考察Ⅰ、さらにⅡがまとめられ、リワークにおける集団芸術療法の治療的要素・役割・位置づけを整理しながら、リワークにこれを導入する際の素材やワークの検討、留意点や有用性を検討している。後半は、事例に立ち戻り、それぞれの治療プロセス、回復過程の検討がなされ、芸術作品に現れた表現を抽出して、回復時期の支援の特質についても熟考を重ねている。</p> <p>まとめとなる終章では、うつ病休職者並びに双極性障害の休職者における回復過程の構造を明示すると共に、新たな自己イメージの表現や内的領域と外的領域の間を柔軟に行き来できる過程がこの回復に寄与することを結論づけ、さらなる課題と共に本論文が締めくくられている。</p>			

(論文審査の結果の要旨)

心理療法は、心のどこに役立ち、それはどのように相手に説明することができるのであろうか。本論文の著者は、長年医療機関において、社会人でありながらもうつ病、双極性障害、不安障害などの問題を抱え、休職中であるクライアントを対象とした復職支援を実践してきた。うつ病復職支援デイケア（リワークデイケア）において、用いられる技法は多岐にわたる。著者はとりわけ、集団芸術療法を専門としており、芸術を用いた支援がどのように功を奏するのかについて、説明責任を果たしたいと感じるようになったという。また、こうした支援においては、企業への復帰が大前提であるものの、そこに伴う個としての生き方の変容を求め、自己の在り方を模索し、他者やコミュニティとの出会いやかかわりから、そうした心の作業をしていく営みの重要性をその実践において強く感じてきた。これらの実践の成果を、より多角的に検討し、心理臨床学的知見を丁寧に考察することで明快にしていくことを目的に、本論考がまとめられた。

著者のある意味心理療法に対するありきたりの「疑問」の解決には、非常に長い年月を要し、本学在学中にも積極的にこれまでの知見をまとめて論文化していく作業を重ねる努力が必要であった。今回の対象者の抱える問題であるうつ病について、第1章で、極めて丁寧に、一つの学派に偏らない広い視野を持ってその概念と治療に関する歴史的概観をまとめている。第2章ではそれを展開させ、リワークの課題と集団芸術療法に焦点をあてて、導入の際のアセスメント、プログラムの組み立てについて、図表を駆使して読者に明快に提示していく。著者の引用文献の多さだけでなく、極めて多岐にわたる参照がなされ、本論文の助走となる問題提起から目的の設定に至る論考の重厚さは、高い価値が認められる。また、Creative Arts Therapy を中心に進められる著者の実践は、芸術を心理療法に用いる際の Art as Therapy や Art Psychotherapy との立場の異同を明確にした上で、続く第3章からは、うつ病を抱えるクライアントに対する事例を素材として取り上げ、熟考を重ねる。第4章では、更年期に発症をみた女性クライアントとのセラピーにおいて、クライアント自身の体験過程を追う。また第5章では、同じうつ症状でも、双極性障害の問題を抱える休職者の事例を取り上げ、集団芸術療法のみならず、そこに現れた言語的、非言語的な治療交流を元にこれまでの検討をさらに深めていく展開をみせる。ここでは、本論文着手のきっかけともいべき、クライアントからのカウンセリングの枠組みや意義についての説明を求められるセラピストの在りようが、注目される。突きつけられたクライアントの痛みともいべきものを、セラピスト自身の体験や、表現された作品の両面から抱え、クライアントに返していく往還がみられる。粘り強いやりとりのあと、クライアントに生起する治療関係からうまれた内面の変化によって、他者との基本的な信頼関係を回復し復職していく姿が描写され、セラピストとしての著者の臨床力をみることが出来る。

これらの事例研究を全体として俯瞰し、治療的要素、導入する際の問題と限界を含めて検討された配慮や、集団芸術療法の実施に関する留意点と有用性について第6章で総合的にまとめられる。さらにこれを受けて、うつ病を抱えるクライアントや双極性障害を抱えるクライアントの回復過程について検討を続ける第7章で総合考察がなされている。まさに治療構造についての検討と、事例理解を二本立てにした重厚な考察といえる。特にリワークにおける社会・心理学的モデルを用いた集団芸術療法の分類概念や、治療導入期から復職期まで治療全体の流れを包含した素材選択やワークの方向性について、明かな図によってまとめ上げており、この治療プロセスを十分に咀嚼し、他のセラピストに向けての説得力を持つ考察と評価できる。またうつ病の問題と双極性障害の問題では、その回復過程において、「表現の詳細」と「表現の方向性」に差異が認められ、それ故支援のアプローチが異なることも示されている。

終章では、総合的に明快かつ読み手に納得させる論考としてまとめ上げられ、価値の高い論文と評価できる。

試問では、本研究の端緒となった個人内の変容に目を向けているセラピストとしての著者が、論考をまとめていくうちに、クライアントやセラピスト自身の内的変化や心の内奥のかすかな変化などが幾分そぎ落とされ、スマートにまとめられていることの是非が問われた。また、集団である意味についての疑問や、認知行動療法との違いなどに討論が進められた。しかしこれらの議論は、本論文の価値をいささかも損なうものではなく、むしろ、データに基づく治療意義のみに偏りがちな医療に新たな視点を投じる重要な論文として、今後の大きな飛躍への布石となるものであった。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 30 年 2 月 21 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第 14 条第 2 項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降